

「変わらないこと・変わったこと」

いきなり見知らぬ外国人が近づいてきて拙い日本語で「おれも岩登りしているんだ！一緒に登らないか？」と話しかけられたとしたら、笑顔で「いいぞ！」と即答し、受け入れ、友達としてクライミング仲間として過ごすことが私には出来るだろうか？

自分がやったことの逆の立場にもし立ったとしたら、彼らが笑顔で受け入れてくれたように、私も同様な態度をとることが出来るだろうかと自問する。



エルピタルでの岩登り 2007年

1999～2001年にかけて青年海外協力隊の理科教師としてサンサルバドルに派遣された。しかし本業の隊員活動よりも忙しくしていたのはフリークライミングだった。フリークライミングと聞いて、ぱっと分かる人は少ないと思うが、岩登りのもう少しスポーツ的な感じになったものと思っていたのであれば良いと思う。最近ではクライミングもオリンピック競技になって耳にした方も多くなったとは思いますが相変わらずマイナースポーツではあると思う。

高校から山登りをはじめ、その後岩登りや冬山など趣味程度に遊んでいた。エルサルバドルでの隊員活動中の2年間はさすがに無理だなと思いながら派遣された矢先、ホームステイ先で見た新聞に、週末にフリークライミング競技のコンペが開催された結果の順位表が掲載されていた。早速ホームステイ先のお母さんにこの大会はどこで開催されたのか興奮しながら聞き出したのを今でも覚えている。

今でもサンサルバドルの国立体育館の外に設置されているフリークライミング用の人口壁。そのころは集まったメンバーが手作りで壁を増設していた。平日の火曜日と木曜日の夜、20人ほど集まって思い思いに集まり登っていた。集まってくるのは学生だったり仕事帰りの人たちだったり。

そんなところに怪しい日本人が登らせてくれと現れたのに何の躊躇もなく仲間として受け入れてくれ一緒に登っていた。平日2回の国立体育館での人口壁のクライミング。週末はサンサルバドル郊外のプエルタ・デ・ディアブロ。地元の人の週末のレジャースポットとなっているそこは最大で50m程度の大きな岩と崖があり周囲に遊歩道が設置されている。そこにエルサルバドルのクライマー達がルートを設定して岩登りをしていたのだった。



トロフィーとメダル



20 年前に優勝を競った友人と再会し岩登り 2023 年

週に3日ないしは4日登っていたのだから日本にいるときよりも充実したクライミングの日々を過ごしていた。時にはエルサルバドル最高峰エルピタルにある岩場まで出かけていたり、海岸に面白そうな岩場があると聞いてみんなで探しに行ったりもした。

またひと月に一回はコンペが開催されていた。国立体育館にある人口壁にコンペ用にルート設定され、アマチュアクラスとマスタークラスに分かれて大会が行われた。ルート設定をするのは参加

者の持ち回りで行っていたから、どこまでも長閑な草コンペであった。

参加者はアマチュアクラス、マスタークラスそれぞれ20人ほどだったように思う。しかしエルサルバドルのクライマーはこれより他にはいなかったのでも小さな大会でも優勝すればそれはエルサルバドル国で一番だと言うことになる。小さな国と言うこともあって月曜日の新聞にはスポーツイベントの結果として掲載されており、私の名前も何度か掲載されていたはずだ。

月ごとのコンペの順位によってポイントが付与され、その集計された結果でランキングが決まっていた。1月から12月までの結果を集計して年間のチャンピオンが決まっていた。2001年は帰国日直前の12月に最後の大会が開催された。その時の年間のランキングはエルサルバドルの友人と1、2位を争ってポイント的にはほぼ同点だったように思う。そして最後の決勝ラウンドで私は最後の最後で落ちてしまい、その大会で優勝を逃し年間ランキングで2位という結果に終わった。

充実したクライミングの時間はあっという間に過ぎていった。エルサルバドルでのクライミングは、単なる岩場の質や山の大きさや登れる岩場の数で言えば決して恵まれているわけではなく、寂しいものかもしれない。しかし、こんなにも充実して楽しくクライミングが出来たのは、ひとえにエルサルバドルの友人達が受け入れ、ともに楽しく時間を過ごすことが出来たおかげだと感じる。

エルサルバドルを最後に訪れてから15年の時間が過ぎてしまった。友人とはSNS等で細々と連絡を取り合っていたぐらいで近況を報告するまでもなく過ごしていた。今年2023年コロナ禍が少し落ち着き、行くなら今だと思い立ちエルサルバドルを再訪した。15年以上ぶりに会った友人達は変わらず笑顔で私を迎えてくれ、昔のように岩登りに出かけ、今回新しく知り合った友人達も出来た。変わらない友人達と楽しいクライミングがそこにはあった。

治安が最悪と言われていたセントロ周辺へも出かけた。おしゃれなカフェが出来ており、どこか長閑なムードが漂う。いつもピリピリと緊張感を持ちながら足早に歩いていた通りを観光客が歩いており、

バッグを肩がけにした女性もいる。カテドラルの前の広場では木の下で人々が涼んでおり、カメラを出してナショナルパレスの前で記念撮影をしている。観光地の当たり前のような風景ではあるけれどもそれが出来ない雰囲気が昔はあったように思う。

まだまだ治安の悪い所があるのかもしれないが、通りを走る車のクラクションは少なくなり、バス停周辺の喧噪が落ち着いたように思う。思い過ごしかもしれないし些細なことかもしれないけれど町の中は少しずつ少しずつ変化しているのだろう。時々魚を買い出しに行っていたリベルタの棧橋周辺に昔の面影はなかった。サンサルバドルにはボルダリングジムも出来、クライミング人口が増えたと友人は言っている。変わらないエルサルバドルの人々と変化していく町並みや空気感を再認識した 15 年ぶりのエルサルバドルであった。

次の訪問はいつになるか分からない。しかし今回の訪問で岩登りでなくエルサルバドルで沢登りをしたら面白いかもしれないというアイデアが浮かんだ。沢登りという日本独特の山登りの形態を中米で実践したクライマーはいないだろうから、何年後かに沢登りの可能性を見い出しに訪れたら楽しいだろうなどこの文章を書きながら夢想している。



信じられないくらい長閑なセントロ



サンサルバドルのボルダリングジム

川原 庸照(かわはら のぶてる)氏

1999年12月～2001年12月 サンサルバドルで理科教師。2006年、2007年それぞれに短期隊員の村落開発普及員としてアウアチャパン、チャラテナンゴで活動。現在はロープを使用して橋梁点検やインフラの点検に携わっている。